

2023. 11. 21. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『研究発表会を終えて』

7月7日付けのこのエッセイで「研究発表会」のことに触れています。研究授業の授業者を決めている最中であることから書き初めて、研究授業に対する私の考えを綴っています。あの当時は研究発表会本番を“遠い先のこと”と捉えていましたが、なんと、あれからあっという間に4か月が過ぎ、先週の金曜日にそれが終わりました。



中学校高等学校は5つの研究授業をしました。

高校宗教の授業の様子

中学校英語・中学校国語・高校社会・高校英語・高校宗教です。どの授業も生徒がよく動き、とてもよい授業になったと思います。今回は「対話」に力点を置き、「主体的・対話的で深い学び」の追求と表現力の育成に力を入れて取り組んできましたが、当日、生徒は人の意見をよく聴き、自分の考えを上手く伝えていました。これまで京都市内の中学校で一緒に働いたことのある先生方に声をかけ、当日の授業を観に来てもらっていたのですが、彼らは一様に高い評価をしてくれました。とりわけ、高校生が話し合いを活発に進めているのを観て驚いたようです。中でも高校2年の国際挑戦科の生徒たちがオールイングリッシュで話し合いを進行している様子は圧巻だったようです。一人は開口一番次のように言いました。「やっぱり私学に通う生徒は違うなあ。」

授業に向かう生徒たちの落ち着いた様子、指示に従って動く様子と言われた以上のことを行う様子、つまり主体的に学習する様子、仲間の前で堂々と自分の考えを伝える様子、仲間の声を共感的に聴き、発表を称える様子など、観てほしいところにしっかりと気付いてくれていました。来てくれた彼ら彼女らは、勤務した学校こそ違えど研究発表で学校を作ってきたときのメンバーたちで、授業を観る目は確かです。忸度なく辛辣な意見を述べることもあるだけに、今日の研究授業に向けて取り組んできたことが、彼らに評価されて良かったと思っています。保護者の方も参観に来られていましたが、授業の様子に感心されていると同時に驚かれているようでした。

「校長先生、こんなふうに授業をしているなんて思ってもいませんでした。楽しそうに授業に取り組んでくれていて安心しました。」ある保護者の方から頂いた感想です。

授業を引き受けてくれた先生方、居残って授業を受けてくれた生徒の皆さん、本当にお疲れ様でした。そして、有難うございました。皆さんのおかげで京都光華中学校高等学校の株が上がったと思います。私はこの研究授業を観て、本校に通う生徒たちとそこに勤務する教職員を一層愛おしく思いました。一方、今年一番の反省は、この様子をもっと多くの皆さんに知って頂くための働きかけが少なかったことです。反省は来年に活かしていきます。そして、もっともっと素晴らしい学校、多くの人から『通いたい!』と思ってもらえる学校にしていきたいと心からそう思います。

2023. 11. 16. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『歯を食いしばって』

角川の国語辞典で「歯を食いしばる」と引くと、「無念さ、いかり、苦痛などをこらえる様子」と書かれています。12日、中学校陸上競技駅伝競走京都府大会の応援に行きました。惜しくも2位と、目標としていた優勝には届きませんでした。生徒たちは素晴らしい成績を残してくれました。一時は1位に並ぶ場面もあっただけに、少々悔しい思いと残念な気持ちもありますが、彼女らは持てる全力を発揮してくれました。

子どもたちが走る姿を見て、久しぶりに“歯を食いしばって”頑張る若者の姿を見た思いがしました。前を走る選手を追いかける時、それでなくても苦しいのに、『行ける！よし、追いついてやる！』『息が苦しい。脚が動かへん。もうアカン。』などと思いつつも走り続ける時間は、それはそれはしんどいことでしょう。レベルの差はあるものの、誰でも一度はこの経験をしたことがあると思います。『少しでも前へ！』『1秒でも早く！』と、タスキに仲間の思いを感じながら走り続けたのだと思います。その姿と表情に大きく心を動かされました。アンカーのゴール後、選手が集まります。お互いの走りを褒め、頑張りを称え合います。それぞれが全力を出し切ったことを認め合います。涙を流す選手がほとんどです。試合後、選手たちの前でコメントを求められました。

「君たちの頑張る姿に、一生懸命走る姿に感動した！」そう言った瞬間です。私をまっすぐに見つめる選手たちの目から流れる満足感・充実感・安堵感からくる美しい涙が私の目に映りました。思わず私の感情も乱れ、声が詰まり思いもかけず涙が頬を伝いました。感涙しながら生徒の前で話をしたのは本当に久しぶりでした。

いつ頃からか、教育界で「がんばる」という言葉が使われにくくなりました。その言葉で子どもを追いつめることがあってはならないということがその主な理由です。ましてや“歯を食いしばって頑張れ！”などと言うのはもってのほかだと言われそうです。一方で、頑張らせること、一生懸命に取り組ませること、力を出し切らせることの意義は今も昔も変わらずあると思うのです。また、この言葉はスポーツで使われることが多いようですが、勉強や人間関係のうえでも同じように使うことがあると思います。とりわけ社会に出てからは、上手くいかないことで、仕事を替えたいと思ったり人生そのものが嫌になったりすることがあるかもしれません。そしてそんなとき、“歯を食いしばって”踏ん張る、耐えることが必要になるかもしれません。

先日の駅伝では、“歯を食いしばって”頑張ったからこそ得た満足感を、選手の美しい涙から見とりました。確かに単なる「根性論」で指導することに対しては賛成できません。しかし、目の前の生徒たちに対して、“ここぞ！”という時には「歯を食いしばってがんばれ！」と激励することがあってもよいと再認識したところです。



2023. 11. 10. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『報恩講』

報恩講とは、宗祖親鸞聖人のご命日である11月28日に聖人を忍んで勤める法要のことです。生徒やその保護者の皆さんは、親鸞聖人がお開きになった浄土真宗の教えが本校教育の基礎となっていることを既にご承知のことだと思えます。そのため、毎年、報恩講は1年で最も大切な仏教行事として位置付けられ、幼稚園から大学院まで含めた光華女子学園を挙げて取り組んでいられています。



★写真は本山での報恩講の様子です★

今年度から本校でお世話になっている私にとっては初めての行事です。事前に要項が配布され、それを読み込む過程でもこの行事に掛ける学園関係者の意気込みを感じ、この行事の大切さを理解するとともに、その一員としての責任も感じてきました。

7日（火）の午後、「学園報恩講」が営まれました。美しい法衣に身を包んだ理事長はじめ僧籍をもつ学園教職員（本校の教頭先生もおられました）の読経が始まりました。代表児童生徒や学生による献灯と献花、学園関係者と代表生徒によるお焼香、児童生徒による合唱など、厳粛な中で行事が進行しました。とりわけ、小学生が大きな声で恩徳讃の合唱を始めたときには大きく心を動かされました。また、会の終盤に小学生から大学生までの代表者が行った「感話」は特に素晴らしかったと思っています。中学生の代表は「人と比べるのではなくて、過去の自分と比較する」ということについて、自身の具体的な体験をもとに話してくれました。また、高校生は大好きなお婆様を亡くした際に、感謝の言葉を伝えられなかったことを悔いながら、聴衆に対して大切なことはできるうちにやってほしいと訴えてくれました。いずれも聴く者に深い感銘を与えたものと確信しています。

合唱も、全員での三帰依文の復唱もとても素敵で、先日行われた Move！等の行事と併せ、こうした儀式的行事が児童生徒の心を豊かに育てるうえでたいへん重要であるということを再認識させられました。また、是非この様子を外部の人たちに観てほしいとも強く思ったところです。

9日（木）の午後には、中学2年生と高校2年生とが本山まで報恩講の参拝に行きました。こちらは更に荘厳な雰囲気の中で法要が取り行われました。広い御影堂に正座し、御仏壇に向かって手を合わせた瞬間に気持ちが切り替わったのは、おそらく私だけではなく、多くの生徒に共通の感覚だったのではないかと思います。

先日来、心の成長ということに焦点を当てて文章を書いています。学校では教科の力をつけることはもちろん大切です。しかし、学校という社会・集団の中でしか身に着けられないもの、それがこうした諸行事の中で「感動」を通して養われる力や考え方なのではないでしょうか。改めて学校行事の大切さを噛みしめています。

2023. 11. 4. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『心の成長 Move！より』

先月27日（金）に、一般的にいう体育大会（本校では“Move”）が終わりました。午後からの天候が危ぶまれましたが、進行を早めたり昼休みを短縮したりすることで何とか全プログラムを終了することができました。本校生徒は現在450人ほどいますが、来校された保護者の方は350人を越え、ご来賓の方々を加えると400人近い皆様方に生徒の現在の生の様子を観て頂けたことをとても嬉しく思います。



さて、光華中学校高等学校は普段どのような見られ方をしているのでしょうか。伝統文化教育や礼儀マナーの指導に力を入れていることもあって、「生活指導の厳しいお堅い女子校」というイメージが強くあるのかもしれないと推察します。実際に、これまでのオープン・スクールや私学フェアで本校や本校のブースを訪ねてくれる生徒は見るからにまじめな中学生高校生が多いように思います。挨拶や言葉遣いがしっかりできること、服装などの校則を遵守できることなどは、社会に出てからも大いに役立つ重要な要素だと思いますし、それを大切にしていることは学校として誇るところではありますが、中学生高校生の子どもたちからすれば、残念ながら“お堅い”“古臭い”と捉えられてしまうのかもしれない。

仮にそんなイメージがあるとしても、「決してそんな部分だけではない！」と声を大きくして言いたいことがあります。それは本校生徒の中に“底抜けの明るさ”と“積極性”“創造性”があることです。普段の学校生活においても、生徒たちは授業中と休憩時間、所謂「ON」と「OFF」の切り替えを上手にしていると思って観ています。



そんな部分が最も顕著に表れたのが先日の“Move!”でした。“おおきに祭”の時も思いましたが、本校では高校生が中心となって行事を行うため、中学校の感覚からすると、随分と自由で開放的に感じます。クラスの仲間への応援はすごい盛り上がりですし、特に高校3年生の創作ダンスについては、その衣装や振付、演出の奇抜さには心底驚かされました。『高校生というのは、自分たちの力でここまで出来るのか！？』初めて観た私の率直な感想です。それも決してやり過ぎてはおらず、可愛らしさの感じられる内容には大いに好感をもちました。そして、この様子を多くの人に観てもらいたいとも思いました。本校に対するイメージを大きく転換できると思うからです。

また、何よりも強く感じたのは、生徒たちがこの行事を通して確実に心を成長させたということです。高校3年生は、いよいよ本格的に進路に向けての取組に突入していきます。この経験をエネルギーに替え、残り少ない高校生活を謳歌してほしいです。

2023. 10. 26. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『豊かな心を育む』

本校では毎週水曜日に「朝の礼拝」を行っています。4月に初めて実施した時には、教わった作法通りに行うことで気持ち一杯でしたが、夏ごろからその内容を深く感じるゆとりができてきました。生徒や教職員の感話はどれも興味深く、真宗宗歌や恩徳讃の斉唱、三帰依文の唱和も気持ちの良いものへと変化してきました。

進行を勤めてもらっている教頭先生が、会を閉めるにあたって毎回のよう「今日も一日、心豊かに…」と言われますが、まさに心が豊かになる感覚を覚えています。

さて、昨日は学期に一度の「講堂礼拝」が実施されました。生徒の代表による献花・献灯に続き、こちら生徒代表による三帰依文の唱和と恩徳讃の斉唱。とても厳かに会は進行了。講堂礼拝の時には講師の方に来ていただいて講話を聴きます。昨日の講師の方は、かつて本校の宗教科を担当していただいていた先生で、現在も京都市内でご住職としてご活躍されています。内容は名前についてお話しいただきました。ご自身の娘さんの名前を例に挙げて、名前に込めた親の思いを時にはユーモアを交えながら分かりやすく話してくださいました。生徒たちも、自分の名前の由来について改めて考えたことだと思います。講堂からの帰り、一緒になった高校生に「校長先生の名前にはどんな意味があるのですか」と尋ねられました。両親が込めた思いや願いを伝えましたが、小学生の頃は自分の名前が気に入らず、人前と言うのが嫌だった思い出も語りました。「えっ、どうしてですか。先生の清人って名前、とってもカッコいいじゃないですか。」生徒からそんな風に言ってもらって、60歳を越えてから自分の名前に誇りをもてたように感じました。

ところで、明日は待ちに待った「Move!」です。今もグラウンドでは3年生がダンスの練習を繰り返しています。4月から取り組んできたものだけに気持ちの込めようもすごいです。また、学級の個性がその内容に見事に反映しているようにも思います。振付や曲も自分たちだけで考えてきたと聞きます。今日にいたるまでにはクラスの仲間とのトラブルや上手く進まない時期もあったことでしょう。それを乗り越えて披露するのですから、後輩たちや教職員が楽しみにしているのも当然だと思います。また、リレーをはじめとした各競技も熱心に練習を繰り返しています。リレーに勝利し飛び上がって喜んで様を見るにつけ、まさに豊かな心を育む取組がここにあると思っています。

明日は天気が少々心配ではありますが、グラウンドが笑顔と歓声に包まれることと思います。そして、生徒たちの心が一層豊かになることを大いに期待しています。



2023. 10. 21. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『不易と流行』

校長室の会議テーブルに一輪挿しをおいています。玄関付近の草花を切ってきては定期的に挿しているのですが、今回のそれはなかなか萎れません。不思議に思ってよく見てみると、何と茎からたくさんの根が生えて、ちょうど水栽培のようになっていました。小さな植物から生物の逞しさを知った思いがしています。



さて、不易と流行という言葉があります。「不易」とはいつまでも変わらないことで、「流行」とは時代に応じて変化することです。

実はこれは、「不易流行」という四文字熟語として、松尾芭蕉が俳諧について唱えた言葉だそうです。確か高校生か大学生の頃に次のように学びました。

その理念は諸説あるが、「俳諧には不易と流行とがあるが、不易の中に流行を取り入れていくことが不易の本質である。また、そのようにして流行が永遠性を獲得したものが不易であるから、不易と流行は同一だと考えるのが俳諧の根幹なのだ。」何だかややこしいことになりましたが、多分そんなことだったと思います。

これを今の教育の現場、つまり今の学校に置き換えて考えてみます。

不易、つまり永遠に変わらないものとは“一人ひとりに居場所と活躍の場があり、みんなが楽しく学べること”“一人ひとりの個性と能力が尊重され、それを最大限に発揮できること”となるのでしょうか。いや待てよ。明治の初め、学校教育が始まった頃、これは不易ではなかったかもしれません。おそらく、児童生徒は背筋を伸ばして先生の話聞くことが是とされ、個性が尊重されることなどなかったのかもしれませんが。昭和の時代の流行を介して、当時の不易は確実に変化しているということです。

一方、今でいう流行とは“生きる力を育てること”“非認知能力を育てること”“主体的・対話的で深い学びを得させること”でしょうか。そういえば、「生きる力」という言葉が学習指導要領に登場して既に20年以上が経ちますが、すっかり教育の世界には不易になったように思います。そう考えると、「非認知能力」や「主体的・対話的で深い学び」もいずれは不易と呼ばれるようになるのでしょうか。

今、本校では27日（金）のMove! に向けて学校全体が盛り上がっています。

グラウンドに出ると、中学生高校生たちが本当に楽しそうに走ったり踊ったりしています。その光景を見ながら、すべての生徒が集団の一員として尊重されていること、そうした雰囲気を守り育て保つことこそが究極の不易だと思うのです。



有名大学を目指して勉強を頑張る人、部活動で全国優勝を狙う人、とにかく学校生活を楽しむ人、夫々の個性と能力を最大限に引き出し伸ばす。そして、夫々の人が互いに認められていること、そんな不易を実現したいと思うこの頃です。

2023. 10. 13. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『当たり前』

朝晩の気温がずいぶん低くなってきました。バイク通勤の私は、最近ではジャンパーを一枚着るだけでは足りず、中にセーターを着こみ下半身にはオーバーパンツをはくようになりました。つい先日まで「暑い、あつい！」と繰り返していたのが嘘のようです。本当に季節の移り変わりは早いものですね。

さて、今回は最近よく考えている「当たり前」について綴っておこうと思います。

生徒指導の厳しい学校に勤務していた頃、よく生徒に次のように言っていました。「当たり前でないことを当たり前のような顔をしてするな！」学校で平気でジュースを飲む、お菓子を食べる、すぐに廊下等にごみを捨てる、授業中に教室や校内を歩き回る、校内外で喫煙する etc、あげだしたらきりがなくいくらいです。一方、つい最近、教職員に伝えたのが次の内容です。「生徒に出会ったら笑顔であいさつを交わす、廊下にごみが落ちていたら拾う、授業中に眠たそうにしている生徒がいたら起こす、授業に集中できない生徒には注意を促す、様子の気になる生徒がいたら声をかけるなどの、当たり前のことを当たり前にやりましょう。」そんな当たり前のことを怠ると思ってもよらない大ごとになることがあるからです。

いじめが原因で自らの命を絶つ児童生徒がなくなりません。そんなことが起こるとTV等で記者会見の場面が放映されますが、「いじめらしきものはありませんでした。」などとコメントされると“えっ？”とってしまうのです。毎日生徒に接していたら必ず見えるものがあるはずだと思うからです。もし見えていないとしたら、それは教師失格だと思うほどです。当たり前の対処をしていれば、起こっていないことがおそらく幾つもあったのではないのでしょうか。しなければならぬ当たり前のことを見逃したり怠ったりすると、信頼を失ったり問題の解決を遅らせたりもします。

入試シーズンが近づいてきたこともあって、小中学校や学習塾の先生方に本校教育の特色を尋ねられることが多くなってきました。勉強や部活動など、夫々の能力を最大限に発揮させる学校だと言ってきましたが、それではあまりに普通過ぎて特色とまでは言えません。考えに考えても“売り”になるようなものを見出せません。そこで、「愚直なまでに当たり前のことを当たり前に実行する学校」と言うことにしました。

来校者や教職員に出会ったら明るく挨拶をする、校則を守る、礼儀やマナーを大切にするなど、すべての生徒にとっての当たり前を遵守させる。また、国公立大学や有名私立大学進学に向けて学習を頑張る、部活動で全国優勝を目指す、毎日きちんと登校するなど、生徒たちの異なる目標のすべてにしっかりと寄り添い、励まし、力を引き出し伸ばす、それが本校教職員の当たり前であり教育に携わる教師の当たり前です。本校教職員は愚直にそんな当たり前を実行することで徹底して生徒を大切にします。



2023. 10. 6. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『緊張感を感じながら』

今週は、京都市内の中学校が本校の講堂で合唱コンクールを行いました。早朝から多くの中学生を迎えましたが生徒たちが爽やかに挨拶をしてくれました。久しぶりに男子中学生の元気な挨拶や少々おどけた挨拶を受けもしましたが、それがとても懐かしい気がして、暫くはこちらの気分まで上がった状態になりました。



仕事の合間にコンクールの様子を観に行きました。中学校の校長先生はとても丁寧に挨拶をしてくれました。もちろん、私の方も丁寧に挨拶を返しました。私が京都市立中学校の校長時代にはまだ校長に成っていなかった人で、ともすれば相手の方が恐縮するような場面ですが、こちらは生徒を送ってもらわなければならない私立学校です。そのあたりのことは十分気を付けました（笑）。

さて、合唱コンクールの内容です。本校の合唱は、当然のことですが女子だけで構成されます。やはり、男声が入ると厚みが増すと改めて思いました。特に3年生になると、男子生徒の声が大人の男性のそれになるのでより合唱に重みが出ます。これまでもそう思ってきましたが、女子校に勤務してそれを一層強く感じたところです。

美しい声で歌う女生徒には自然と気持ちが向きました。一方で、一生懸命に歌う男子生徒たちに目が向きます。『普段はガサガサしているのだろうか』とか『先生を困らせることもあるんじゃないかな』と思える男子生徒も中にはいました。そんな彼らが緊張しながらも一生懸命に歌っています。初めて見た私でさえその部分に心が動かされました。ましてや、その子たちの普段の様子を知っている先生たちにとっては堪らない光景だろうと思います。かつて同じような経験をした者として、その先生方の気持ちは十分に分かるつもりです。

担任の先生の中には、前日はあまり眠れなかった人がきつといたと思います。かつての私がそうでした。『あの子はちゃんと歌えるだろうか』『あの子は舞台に上がれるのだろうか』『あの子が来なかったときにはどうするのか』『周りの子たちはあの子のことをちゃんとフォローしてくれるだろうか』『最後の練習の時に言った注意点を守って歌ってくれるだろうか』『緊張しすぎるな』『自信をもって歌え』『優勝したら、或いはダメだったらなんて声を掛けようか』等々、考えだしたらもうダメ、まったく眠れなくなってしまいます。でも、そんな頃を懐かしく思い出しました。

“緊張しながらも精一杯の力を発揮する” そんな場面は様々あると思います。運動部活動の試合はもちろん、文化部のコンクールや発表会もそうでしょう。また、一生懸命勉強してきた成果を試すテストに向かう際にも同じような気持ちになるはずです。

この緊張感を乗り越えて目標を達成したときに生徒は大きく成長を遂げます。だからこそ、学校では意識してこういう場面を作らなくてはいけないと思うのです。

2023. 9. 28. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『時々考えること その2』

公立中学校の教師を37年間務めました。また最後の11年間は校長として学校を任されもしてきました。仮に85～86歳まで生きられるとすると、おそらく人生の約半分を学校で生徒やその保護者と共に過ごしてきたということになります。

「(中学校の)先生はたいへんですね。」これまで何度もそう言われました。また、「ご苦労さん！」と労いの言葉をかけてもらうことも少なくなかったです。身体や心が疲れたことは確かにあります。

しかし、この仕事を“たいへん”と思ったことや“苦労”と感じたことはありません。

教師がブラックだという人達に、この仕事は金色・バラ色だと声高く言いたいです。

定年退職をして2年間教員養成に携わってきました。教師を目指す若者を育てることに対して遣り甲斐も感じてきました。しかし、物足りなさを感じていたのも事実です。『リタイヤするとはこういうことなんだ』と自分に言い聞かせ、『まだできる!』という気持ちを抑え込んできました。そんな折に本校へのオファーを頂きました。

「お父さんがやりたいのなら応援するよ」家族の声に後押しされて今ここに居ます。

初めて校長となった49歳の頃とは違います。身体には随分とガタがきています。今もグラウンドからリレーに沸く生徒たちの声が聞こえます。当時の私なら飛び入り参加でもして一緒に走っていたところですが、もうそんな気持ちにはなれません。一方で、様々な経験を積んできた分、生徒の周りで起こる事象への対処の仕方は当時とは比べものにならないほど上手く、そしてスムーズにできていると思えます。

「自己有用感」という言葉があります。これまでは生徒のことに使ってきましたが、一旦リタイヤを経験した今の自分にとっては、すこぶる大切な感情であると思っています。「自己有用感」と「自己肯定感」や「自尊感情」との一番の違いは、他人の役にたっていると思えるかどうかでしょう。今の職場において、生徒や保護者、教職員などから“校長先生”として認められ、頼りにされていると感じる場面は少なくありません。少々手前味噌で恐縮ですが、レスpektされていると感じることもあります。そして、この気持ちが今の私を支えてくれています。

このエッセイの第1号の最後に次のように書いています。「そのような中であっても変わらないもの、いえ、変えてはいけないものがあります。生徒を大切にする気持ちです。…略… その子たち一人ひとりを尊重し大切にしたいと最初の職員会議で教職員に伝えもしました。…略… これらすべての子たちを真に大切にしたいと思いますし、全教職員でしなければならないとも考えます。」

この学校から写真の中のような生徒の笑顔を絶やしてはなりません。いよいよ来年度の生徒募集が本格化する今、改めて上の文章を噛みしめています。



2023. 9. 22. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『時々考えること』

「3年B組金八先生」の第2シリーズ（全25話）の中に「腐ったミカンの方程式」というテーマの何話かがありました。中学生の「非行」や「校内暴力」を扱った作品です。武田鉄矢演じる金八先生のクラスに問題行動を重ねた少年“加藤”が転校してくるところからその物語



は始まります。“加藤”はクラスになじめない。教師反抗や器物破損を繰り返す。エスケープにバイク盗、万引きなどを重ねて警察に補導される。当時の多くの中学校に“加藤”のような生徒は少なからずおり、この問題に真正面から向き合った話題作です。

その当時は、日本中の中学校が荒れており、窓ガラスのない校舎や深夜に徘徊する少年の姿がTVに映し出されることが珍しくもなくなっていました。中学生や中学校の“荒れ”が社会問題化し、マスメディアでも頻繁に特集が組まれてもいました。そのようなとき、私は教師を目指す大学生でした。

そんな状況からなのか、小中高校の教師が主人公のドラマも多く放映されました。子どもの家庭にまで踏み込んだり、生徒同士や生徒と教師がぶつかりあいながらも絆を深めていったりするストーリーはどれも感動的で、教師は若者に人気の職業の一つになっていました。運よく教員採用試験に合格し中学校教師として勤めだしました。今とは違って、採用1年目から担任をするのは当たり前で、先輩方のやり方を観ながらの“ぶっつけ本番”の教師人生の始まりでした。私が初任で赴任した学校にも“ヤンチャ”が少なからず居ました。その学校の校舎はとても古く、初めて接した“ヤンチャ”たちの姿がそこに重なって、寒々とした第一印象は今も強く心に残っています。

補導問題の解決や学力補充のために深夜まで家庭訪問することは珍しくはなかったです。夜の8時頃から学年会がもたれたことが何度もありました。『生徒のために』と取り組んだ結果、卒業式の日“しんどさ”が“よろこび”に替わる経験もしました。

昨今、教師の働き方が見直され、遅くまで家庭訪問をすることは少なくなったと聞きます。部活動の時間が大幅に縮減され、勤務時間外で生徒と関わる場面は極端に少なくなりました。私たちが頃は…と昔のことをノスタルジックに語るつもりはありません。また、“ヤンチャ”たちと関わり続けたあんな時代が再来するとも思いませんし、来てほしいとも決して思いません。しかし、教育の世界から学習指導や生徒指導に注ぎ込む「熱」と「誇り」とを決してなくしてほしくはないのです。

教師がサラリーマン化し、私たちが感じたあの頃の“よろこび”を今の若い教師が感じられていないとしたら、それが教職のブラック化の原因の一つかもしれません。もしそうなら、それは日本の教育にとって、また、日本の社会にとっても大問題です。少々大げさな文章になってしまいましたが、最近そんなことをよく考えています。

2023. 9. 13. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『おおきに祭』

本校では文化祭のことを「おおきに祭」と呼びます。誰が名付けたのかは知りませんが、なかなか素敵なネーミングだと思います。保護者の方や



先生方、地域の方、そして何よりも共に学校生活を送る仲間に対して感謝の気持ちをもてるようにとの思いや願いが伝わってきます。

2日間の「おおきに祭」を通じて感じたことを綴っておきます。

一番感じたのは、生徒の楽しみ方の上手さです。教師としては中学校の文化祭しか知らなかったのも、それに比べるとかなり自由度が高いなと思いました。高校生が主流ということもあるでしょうが、中学校のそれとは楽しみ方が随分と違います。そう言えば、自分が高校生の時も“こんな”だったかなという記憶が蘇ってきます。（40年以上前の昭和の時代のことだから自由度はもっと高かったかもしれません。）

校内での食べ歩き、舞台と会場とを一体化したステージ発表の盛り上げ方、お揃いのTシャツに身を包んで（私たちの頃は法被でした）クラスの団結感を楽しむこと、この時とばかり先生との時間を楽しむこと、本当に楽しい空間と時間でした。

次に思ったのが、生徒の意外な一面の発見です。『この子、こんなにダンスがうまかったのか！』『普段は真面目に勉強している姿しか見ないのに、こんなにすごいパフォーマンスができるんや！』『美しい声で歌うなあ』『見事な演技力だ！』『こんなにオモロイことのできる子やったんや！』『えっ、こんなにリーダー性があったなんて？』いろいろな発見です。「おおきに祭」以来、見方が変わった生徒が何人もいます。

更に、教職員の子供を思う気持ちの強さです。生徒を主人公にするために、そして生徒を楽しませるために様々な努力と工夫もしていました。上の写真は教職員が吹奏楽部の演奏に合わせてパフォーマンスをする直前のものです。高校3年生が引退して初めての本番ということで、不安もあり何とか盛り上げたいということで生徒たちから依頼がありました。実は私も参加したのですが、この後、会場全体が揺れんばかりの拍手と手拍子、踊りと歓声に包まれたことはここに書くまでもありません。

最後に来年度に向けての要望を2つほど示しておきたいと思います。1つ目は、合唱や演劇、特に合唱にもっと力を入れてはどうでしょうか。上級生の美しいハーモニーから下級生が色々と学ぶことは学校ならではの取組です。もう一つは2日目のプログラムをうまく整理して舞台発表や模擬店の取組を全員が楽しめるようにできないかということです。とてもよい取組や発表があるのに全員が見られないのはもったいない気がします。是非ご検討ください。とにかく楽しい2日間でした。そして生徒が成長した場面でもありました。次は来月の「Move！（体育祭）」が大いに楽しみです。

2023. 9. 5. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『歓声』

グラウンドから歓声が聞こえてきます。はじめは小学生かと思っていましたが、どうも違うようです。カーテンの隙間から覗き見ると中学生がリレーをしていました。どうやら、来月のMove!（体育祭）に向けて本格的に練習が始まったようです。



リレーは、今も昔も体育大会の花形種目です。精一杯走る選手と精一杯応援する人たちの声が歓声となってグラウンドに響き渡ります。こういう声を聞き、雰囲気を感じると、自然と『学校っていいな』と思います。前回のこの通信の結びに「時にはぶつかり合いながらも集団の中で自分を見つけ、そんな自分を磨き続け、仲間と共に成長していくところ、それが学校ではないかと思う」と書きましたが、まさにその場面が目の前にありました。

誰かが走っているときには声が枯れんばかりに応援し、アンカーがゴールした瞬間に多くの人がグラウンドに倒れこむ様子を観て、学校教育のあるべき姿を思い出したように思いました。足が速かろうが遅かろうが、勉強が得意であろうが不得意であろうが、とにかく全力を尽くすこと、それができれば誰からも非難されることはありません。今日のリレーの場面では、いい加減な態度で走る人は一人もいませんでした。足の遅い人に対してもみんなが全力で応援し、その人が完走した際には多くの人がねぎらいの言葉をかけている姿を観た時には、本当に温かい気持ちになりました。

一方、決してそんな風になってほしくないのですが、反対の場面も想定できます。足の遅い人に対して「あの子のせいで負けた!」と平気でそういう言葉を吐く。負けているからといって、いい加減な態度で臨んだり全力で走らない、こんな状況だとみんなが嫌な気持ちになります。同じこと（リレー）をしていてもちっとも楽しくありません。残念ながらこんな経験をしたことがある人もいないかと思います。

集団には、もっと言えば社会にはいろいろな人がいます。リレーでいえば足の速い人・遅い人となるでしょうが、様々な立場の人がいるということです。一人ひとりの個性を尊重し、互いの良いところに目を向けてレスpektし合えればとても良い集団（社会）に育っていくはずです。そして、そんな集団なら、嫌な思いをする人がなくなりますし、“いじめ”や“差別”が起こることもないはずです。

Move!（体育祭）の前には「おおきに祭（文化祭）」があります。その際にも、他学年の人も含めて仲間の取り組んでいることに理解と敬意を払い、互いに仲間を尊敬し合って鑑賞し、称え合いましょう。講堂で行われる舞台発表の際、誰一人白けることなく、今日のリレーの時のように、舞台上で演じている人に対して心からの声援を送りましょう。そうすれば、きっと講堂も愛に溢れた素敵な歓声に包まれると思います。

2023. 9. 1. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『学校というところ』

毎朝5時半には愛犬の散歩に出ます。今朝は、この夏初めて『あれっ、夜明けが遅くなったかな！？』と感じました。そう言えば、夕方少し早く暗くなるようにも思いますし、草むらからの“虫の声”も大きくなってきました。確実に季節は移っていると感じています。

さて、2学期が始まって1週間が経ちました。夏休み中も多くの生徒たちと会ってはいたのですが、授業中の子どもたちの様子を観たり、制服姿の子どもたちと接したりするようになって、改めて2学期が始まったことを実感しています。

中学校陸上部の4×100mRの全国制覇をはじめとして、この夏も生徒たちは各部で輝かしい成績を収めました。

このところ、学校の部活動について考えることが多くなっています。と言うのも、夏休みに“光華カップバレーボール大会”を催したことがあるのだと思います。

光華中学校にはバレーボール部がありません。これを作りたいとの思いから“光華カップ”を始めました。勿論、高等学校のバレー部顧問からの申し出でしたが、創部したい理由を聞くうちにその思いに納得し、賛同している自分がいることに気づきました。そして、それ以来、学校における部活動の役割や部活動を学校ですることの意義について、これまで以上に深く考えるようになっていきます。

学生をはじめとする若者たちに教師の世界がブラックだといわれるようになって久しいです。勤務時間の縮減を図って働き方改革が急速に進行もしています。特に、部活動の時間が大幅に縮減されつつある現実、社会の目が集中している課題でもあります。3年間続いたコロナ禍もこの動きに拍車をかけ、部活動のあり方が大きく様変わりしてしまいました。思いっきり活動したい子どもは学校を離れてクラブチームへ加入するようになり、熱心に指導してきた部活動顧問の中には“やる気”をそがれてしまった教師も出てきました。

この流れは一定理解しつつ、それでも、朝から一緒に学習し、休憩時間や昼食時には一緒に笑い合ったり、時には言い争ったりする仲間と共に部活動にも励むことは、その競技をすることだけのために集まった者たちとの活動に比べて、その意味は大きいと思うのです。また、「人を育てる」という意味からも、選手の学習面や日頃の生活の様子まで熟知している教師が部活動を指導することもまた重要だと思えるのです。

部活動の目的は「人間形成」あるいは「人格形成」であって、「京都で一番になること」などは目標です。言い換えれば、部活動を通して「素敵な人となる」ことが目的なのです。時にはぶつかり合いながらも集団の中で自分を見つけ、自分を磨き続け、仲間と共に成長していくところ、それが学校ではないかと思うのです。



2023. 8. 26. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『2学期の始業式に』

今日から一番長い2学期が始まりました。始業式では「“今”をどう生きるかで未来は決まる」ということをテーマに話をしました。夏休みの期間、生徒たちは様々な経験をしました。勿論思いっきり頑張ったと思います。でも、多分悔しい思いや悲しい思いをした者も少なくないと思います。その過去を変えることはできません。だから、その結果を真摯に受け止め、これからの生き方に活かしていくしかないので。よく「過去（と他人）は変えられないが、未来（と自分）は変えられる」と言いますが、今回はそれを拡大解釈して伝えました。



確かに“今”をどう生きるかで未来は変わりますが、その際に『あの時の悔しさや悲しさがあったから今の自分がある』と思えたりもするものです。つまり、過去に起こった“事実”は変えられませんが、その“解釈”が変わることはあるのです。だからこそ、“今”を精一杯生きて未来と過去とを変えましょう。一生懸命に取り組んだ人は、結果がどうあれ『面白かった』と言うのに対して、いい加減な取り組み方しかなかった人に限って『ショーもな』と言ったりもするものです。2学期は大きな行事があるだけでなく、高3生にとっては大学入試も始まるという、人生にとって大事な節目の時期です。今こそ、学校でしか経験できないことに全力で取り組みましょう。

昨日、中学校陸上部の4×100mRのメンバーが全国大会で優勝を果たしました。

これまで。京都市大会・京都府大会・近畿大会と優勝を飾ってきたメンバーですが、全国大会ではそう簡単にはいかないだろうなと思っていました。

何とも言えない緊張感のなかレースが始まりました。アンカーにバトンが渡った時には1位だと見えたが、ほとんど横一線。アンカー勝負になりました。

アンカーが一気にトップギアに入れて全速力で快走するうち徐々に差がつき始めます。約2mの差をつけて優勝。「来た、きた、キターっ！」ゴール付近で見ていた私は鳥肌が立つ思いでした。



全国には10,000校以上の中学校があります。その頂点に立ったのですから物凄いことです。実は、私がこの4月、グラウンドで練習する彼女らと初めて会ったとき、次のような会話をしました。「校長先生、私たちは全中で優勝を目指して練習しています。もし、全国大会に出られたら愛媛まで見に来てください。」「分かった。その時は必ず観に行くから優勝してな。」春の大会、夏の市・府・近畿大会、その間の厳しい練習、話し合いやトレーニングを重ねて、昨日、見事にすごい夢を実現させたのです。

彼女らから「夢はかなう！」ということを再認識させてもらいました。

2023. 8. 17. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『中学校近畿大会』

中学陸上の近畿大会で本校が総合優勝を飾りました。陸上競技は基本的に個人戦ですが、個人の成績がポイントとなり合計ポイント数で総合優勝校（団体優勝）が決まります。京都市及び京都府大会では圧倒的な強さで優勝を果たしましたが、近畿大会となるとなかなか難しいと思っていました。

4×100mリレーと2年生100m 走の優勝が大きくポイントゲッターになったのは間違いありません。しかし、表彰台は逃したものの200m走や円盤投げ、1500m走でのポイントも大きかったと聞きました。みんな、ホントにお疲れ様でした。

私が嬉しかったシーンを紹介します。表彰式終了後に選手たちが私のところにアドバイスを聴きにきてくれました。率直な感想と次の全国大会への激励を述べたのですが、前の生徒の肩の間から何とか私の話を目で聴こうと頭を動かしている生徒を観た時、この子たちの本気を悟ることができました。また、その後のことです。大会には京都市の先生方が監督やコーチとして京都チームに帯同してくれています。彼女らはその先生方にもお礼とアドバイスと聴きにいったのです。そんな生徒たちとそのような生徒を育てた先生方に“あっぱれ！”のカードを差し上げたいです。

その二日後、今度はソフトテニスの近畿大会団体戦を観に行きました。京都府までは順調に勝ってきた選手たちも近畿大会となるとスナリとは勝たせてもらえません。それでもベスト4までは駒を進めました。ここからは全国大会を目指す勝負です。実は、中学校のほうが高校より全国大会への出場が難しいのです。高校の場合は、各都道府県で1位になれば出場できますが、中学校の場合は、近畿で3校しかその場へ行けないのです。まずは準決勝です。この試合の前、次に対戦することになる準々決勝の試合を観ていました。その時、私のことを知らない第1シード校の監督が次のようなことを言っていたのをたまたま耳にしました。「決勝の相手は京都光華の方がええんや！テニス素直がやし、ずっとやりやすい。」その言葉通り、思い切ったプレーをする学校が対戦相手に決まりました。相手の選手は1本目から前衛にボールをぶつけにきます。“負けて元々”のガッツ溢れるプレーに翻弄され、終始相手のペースで戦うことになって負けてしまいました。次の3位決定戦も同様です。“格下”の相手です。1番手は4-0で勝ちました。2番手と3番手の試合は共にファイナルゲームにまでもつれましたが、“ここぞ！”という時に思い切ったプレーをしたのは相手の方でした。

全国大会への出場権を逃し、悔しい思いをしたでしょうが、本校の選手たちは多くを学んでくれたはずで。近畿大会や全国大会で勝つためのプレーが見えてきたように思います。この悔しさを2年生以下が来年以降へ引き継いでくれることを願います。

